



▲本折日吉神社 小松市本折町1 TEL:0761-22-0163

朱塗りの鳥居

青空に本折日吉神社の朱塗りの鳥居（とりい）が映える。

鳥居は神社などで、神域と人間が住む俗界を区画するもの（境界）であり、神域への入口を示すもの。鳥居の色は神社によって様々だが、やはり一番印象に強いのが赤＝朱色。赤は古来より「魔除け」を表す色。神社は神聖な場所なので邪惡な物が入らないよう願いをこめて入口（＝鳥居）は赤い色にしたのだと考えられている。

小松の街並みは南北に細長く、お旅祭りで有名な小松市の本折日吉神社は旧北国街道に面し、加賀の地が越の国と呼ばれていた頃に創建されて以来、八百年を越える歴史を持つ。藩政時代は前田利常公がここを祈祷所として、小松能美の総社と定めた。その昔から「山王さん」「日吉さん」と呼ばれ親しまれ、「開運魔除け」「鬼門除け」の神様として厚い信仰を集めている。

本折日吉神社にはお稲荷さんも祭られていて、朱塗りの鳥居があるが、イナリとは「鉢物（いもの）が成り」と言い炉の中の赤い鉄鉱石に見立てたという説や、また「稻穂が成り」とも言い、実つてこうべを垂れる黄金色に輝く稻穂を朱

しき名や
しらまく萩薄
芭蕉

芭蕉も訪れた
本折日吉神社

芭尾芭蕉は奥の細道の旅の途中、元禄2年（1689）7月24日（陽曆9月7日）小松に入り、近江屋という旅宿に泊まった。翌25日に出立しようとしたが、小松の人々に引留められ、小松山王宮神主藤村伊豆守章重（俳号鼓蟾（こせん））の館に一泊し、同夜芭蕉はじめ曾良など十人が催した山王句会は有名である。



本折日吉神社の丹塗矢（にぬりや）は妃神の建玉依比売命（たけたまよりひめのみこと）が目の前の小川に美しい矢が流れてきたのを見て拾い持ち帰り朝夕ながめいたら妊娠し男子が生まれたという子授けの矢。



紅・赤・朱。「あか＝あけ」という言葉は、すべてに明るい希望の気持ちをその語感にもち、その色は生命・大地・生産の力を持つ。
南加賀の「紅」を探してみよう。

写真・文 タカヤナギ ユタカ

くれない 紅の 南加賀

紅、赤、朱は血の色であり、太陽の色、炎の色。生命に欠かせない色だ。

ちなみに「あか」の語源は「あかるい」からきているというのだが、確かに古代、焚き火の赤い火は暗闇に「明るさ」をもたらしてくれたのだし、空を赤く染めて昇る太陽も、暗い夜に「明るさ」をもたらすものだ。そして「お母さん」とは「カカ」、「カアカ」であって、「カッカツ」といいうのは、太陽が燃えている様子を表している。お母さんは太陽のようにいつも明るくて、あたたかい存在なのだ。

考えてみれば、日本人は祝い事があれば、紅白の幕を張り、紅白饅頭を配り、お赤飯を炊き、紅白の水引がついた熨斗袋にご祝儀を入れて渡す。そして日本の国旗は白地に赤である。ちょっと関係ないかもしれないが、大晦日には紅白歌合戦である。

紅白の意味については諸説あるが、太陽を象徴する赤は全ての穢（けがれ）れを淨（きよ）める火の色。一方、白も太陽の象徴なのである。白は「白日（はくじつ）つまり、くもりのない日の光のことだ。とにかく紅は日本人の心に深く刻まれた色であり、ここ南加賀にもステキな紅がたくさんある。